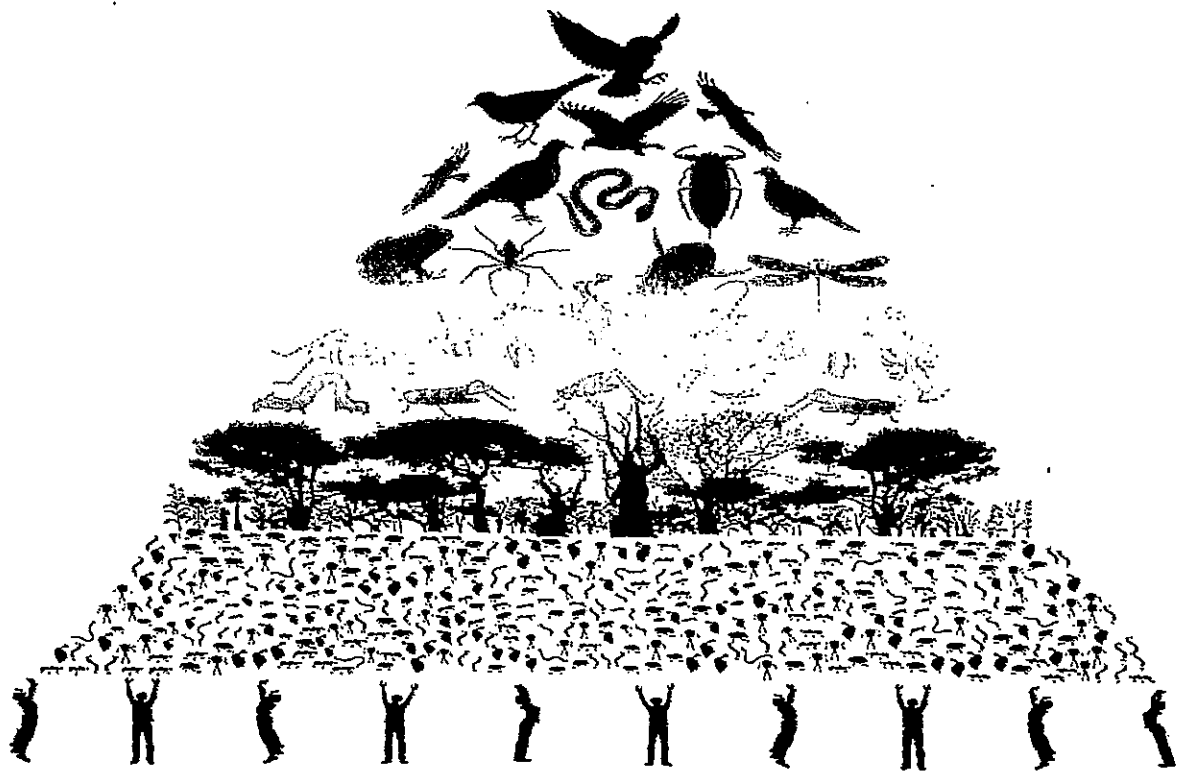


第6回

「田んぼの生きもの調査シンポジウム」

市民による民間型環境支払い徹底討論

生きものを育む田んぼをどのように守り発展させるのか



平成21年12月 4日(金) 13:00~

日本橋社会教育会館ホール 定員200名
(日本橋小学校複合施設 8F)

東京都中央区日本橋人形町1-1-17 地下鉄 人形町駅下車徒歩4分

特定非営利活動法人

生物多様性農業支援センター

お問合せ TEL 042-711-7015 FAX 042-711-7016
E-mail tambo@wehab.jp

協賛 全国農業協同組合連合会 パルシステム生活協同組合連合会
生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 株式会社アレフ
あきた北央農業協同組合 日本労働者協同組合連合会
協賛募集中



昨年、韓国で開催されたラムサール条約締約国会議で水田決議が全会一致で採択され、田んぼが単に「食料」を生産するだけでなく様々な生きものを育てていることが確認されました。しかし、このことが国民全体のコンセンサスになっているかという点と実態はそうではありません。国会での議論は減反政策や水田フル活用、更に個別所得補償という従来型の農業政策が中心で、生きものを育てている田んぼをどうするかという視点での議論はありません。その結果、国民の認識も農業の大規模化による国際競争力の確保、食糧自給率の向上、食の安全性の確保等、農業と食料問題に終始しているため議論が一定の枠内に留まり国民全体に広がっていないのが実情です。そこで農業問題を国民全体の議論にするために視点を市民による環境支払に絞り、「生きものを育てる田んぼを今後どのように守り発展させるのか」という議論を徹底的にしてみたいと思います。

私たちはこれまで5回の田んぼの生きもの調査シンポジウムを開催し、田んぼの生きもの調査活動の普及に努めてきました。田んぼの生きもの調査活動は様々な側面を持っています。生産者と消費者が生きものという価値感を共有する新たな産直交流活動、体験だけでなく環境の視点を加えた新たな食農教育活動、生きものの力を借りた生物多様性を育てる新たな営農活動、これらの活動は田んぼの生きもの調査という非常にシニフィカルな活動が支えています。更に生きもの調査活動には大人や子どもの区別がなく、生産者と消費者という区別もなく、国境を越えて多様な人間が集まるところが特徴です。このような特徴を持った活動経験のなかから様々な立場の人たちが農業問題を語り、市民による環境支払を通じて生きものの命を育てている田んぼをどのように守り発展させるのか徹底討論をし、議論の輪を国民全体に広げたいと思います。

日時：平成21年12月 4日（金）

13:00~17:00

場所：日本橋社会教育会館ホール

（日本橋小学校複合施設 8F）

東京都中央区日本橋人形町 1-1-17

参加費：資料代として1000円

（学生500円）

タイムスケジュール

12:00

会場、受付開始

13:00

開会

13:00~13:15

開会挨拶

13:15~14:15

基調講演

14:15~14:30

休憩(会場設営)

14:30~16:30

徹底討論

16:30~16:55

質疑応答

16:55~17:00

閉会挨拶

1. 基調講演 蔦谷 栄一 株式会社 農林中金総合研究所特別理事
テーマ「新政権下の農業施策と民間型環境支払い」
2. 徹底討論：コーディネーター 原 耕造 NPO 法人生物多様性農業支援センター理事長
パネラー
生きもの調査実施生産者団体
田中 安規 あきた北央農業協同組合代表理事専務
渡沢 賢一 農事組合法人山形おきたま産直センター代表理事組合長
生きもの調査活動指導者
宇根 豊 NPO 法人農と自然の研究所代表理事
岩渕 成紀 NPO 法人田んぼ理事長
生きもの調査実施市町村
渡邊 竜五 佐渡市農業振興課
宮垣 均 豊岡市コウノトリ共生課
行政
西郷 正道 農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課課長
学識経験者
荘林 幹太郎 学習院女子大学 国際コミュニケーション学科教授
生きもの調査実施消費者団体
若森 資朗 パルシステム生活協同組合連合会理事長
大川 智恵子 生活協同組合連合会コープ自然派事業連合理事長

第1回生物の多様性を育む農業国際会議開催要項（案）

International Conference for Enhance the Biodiversity in Agriculture (ICEBA2010・あいせば2010)

(第11回日韓中環境創造型稲作技術国際会議、第5回日韓田んぼの生きもの調査交流会)

2010年に兵庫県豊岡市で開催されることになった第11回日韓中環境創造型稲作技術交流会議は、豊岡市が開催する第4回コウノトリ国際会議（10月30、31日）と連携し、その分科会の重要な一部として開催し、併せてカルタヘナ条約国会議（名古屋10月11～15）、CBD生物多様性締約国会議（10月18～29日）への農業分野からの提言集会という位置づけで開催したい。

1. 大会スローガン：生物の多様性を育む農業をめざして

2. 主催団体：豊岡市・兵庫県・ICSBA2010 実行委員会

3. 開催日程：

キックオフ研究会：2009年10月29日（木）

育苗・抑草研究会：2010年3月20日（土）

抑草・生き物調査：2010年5月4・5日（土・日）

農法別生き物調査：2010年6月5日（土）

第1回生物の多様性を育む農業国際会議（ICEBA2010）：2010年7月2日～4日

4. 実行委員会及び参加団体

<日本>

豊岡市、JA たじま、NPO 法人 民間稲作研究所、NPO 法人 田んぼ、NPO 法人 生物多様性農業支援センター、

(財) 日本野鳥の会、ラムサールネットワーク日本、NPO 法人 日本有機農業研究会、NPO 法人 全国有機農業推進

協議会、NPO 法人 有機農業技術会議、兵庫県有機農業研究会、(社) 全国愛農会、IFOAM ジャパン、日本自

然農法協会、日本 BMW 協会、(株)アレフ、パルシステム生活協同組合連合会、ネットワーク21、生活クラブ生協、

東都生協、日生協、農文協、各地方自治体

<韓国>

韓国環境農業団体連合会、韓国自然農業協会、水田湿地 NGO ネットワーク、アマガエル生産組合、韓国 BMW 協会、

各地方自治体

<中国>

延辺自治州 雲南自治州、中国生態農業研究所

<海外団体>

FAO アクアカルチャー、IFOAM

5. 後援団体：農水省・環境省・国土交通省・外務省・文科省

6. 参加人数：500名（海外100、地元200、県外200）

7. 第1回生物の多様性を育む農業国際会議（ICEBA2010）スケジュール（案）：

<第1日：7月2日>

13:00 登録・受付・案内

13:30 生物の多様性を育む農業現地研修会（有機→特裁→慣行）

17:00 移動

18:00 開会行事 実行委員長あいさつ 歓迎あいさつ 来賓あいさつ

19:00 レセプション

<第2日:7月3日 全体会I>

9:00 基調講演 生き物と共に歩む21世紀の農業と地域経済 中貝宗治

9:30 事例報告1 中国

事例報告2 韓国

事例報告3 日本(佐渡のとき)

11:00 休憩

11:15 基調報告1 生物多様性農法の経過と課題・稲葉光國

12:00 基調報告2 農法別生きもの調査結果報告・岩淵茂紀

12:45 昼食

【分科会I】

14:00 有機農業に関する技術交流— いのち育む有機農業を求めて—

— 自然の循環機能をどう活用するか —

i) 基礎になる健康なイネづくり

ii) 多様な水田生物の活用技術の現状と課題

○抑草技術(アイガモ、ジャンボタニシ、蟹、

冬期・早期湛水2回代かき、機械除草、紙マルチなど)

○土着微生物を活かした循環型肥培管理技術

○病虫害防除技術(イネミズゾウムシ・カメムシ防除)

iii) 畑作・転作水田に関する環境創造型農法の現状と課題

○日本における輪作体系の現状と課題

○中国・韓国における輪作体系の現状と課題

【分科会II】

14:00 基調提案 環境創造型農業を支える環境モニタリングのあり方

i) 日本

ii) 韓国

iii) 中国

*項目など岩淵氏が整理し、案を作成する

17:00~18:00 分科会まとめ

<第3日:7月4日>

*3日目の内容は、豊岡市が案を作成する

~環境創造型農業による地域経済の再建と自給率向上をめぐる~

基調講演・保田 茂

i) 生産調整と地域水田農業ビジョン

ii) 有機農業と地場産業の復権

iii) 環境創造型農業の政策的支援について

全体会 III

閉会行事

①大会宣言

②次期開催国(韓国)と開催スローガン

「生物多様性を育む農業国際プレ会議 ICEBA2010 pre-Meeting」 ～ CBD_COP10に向けて ～

2010年名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議に向けて、国内外で生物多様性の問題の議論が盛んに行われるようになりました。

現在、過去平均の1,000倍以上のスピードで絶滅が進み、年間4万種に達するとも言われ、6億年前の顕生累代から始まって以来6度目の大絶滅時代に直面しています。さて、日本の「田んぼの生きもの」は、2009年2月の桐谷委員会において5,670種と評価され、水田農業はこれらの多様な生物が存在するからこそ成立していることが明確になりつつあります。

そこで、「生物多様性を育む農業国際会議 ICEBA2010」、「生物多様性条約会議 COP10」のためのプレミーティングとして、特に「水田農業と生物多様性の向上の共存」に向けて国際的に活躍している人々とCOP10名古屋での水田に関する決議文とサイドイベントの可能性を話し合う場を設けました。

さらに、本会議を、私たちの取り組んでいる活動の意義を統一し、今後のスケジュールの確認などを行い、CBD_COPに向けたキックオフ会議として位置づけたいと考えています。

1. 日時：2009年11月3日(祝) 13:00～17:00

2. 場所：コープビル 10階 101会議室

東京都千代田区内神田1-1-12 Tel: 03-3294-3821

案内図(下記のホームページ参照)

http://www.tasukeai-net.jp/091001coopbiru_annai.pdf

3. 主催団体:

NPO法人 生物多様性農業支援センター、NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本(水田部会)、持続可能な発展のための日本評議会、Bird Life Asia、NPO法人 民間稲作研究所、全農、パルシステム連合会、NPO法人 メダカのがっこう、NPO法人 田んぼ

4. 内容(全体の司会進行 BASC 理事長・原耕造)

1) プレ会議の意義と概要について

岩淵成紀(生物多様性農業支援センター副理事長)

2) このプレ会議の目指すもの

呉地正行(ラムネット-J 水田部会長)

3) 基調講演 “Valuing Biodiversity in the rice-based ecosystem”

Dr. Josef Margraf Tianji Biodiversity Research & Development Centre

4) 事例発表 I “Bali as the Organic Island”

Mr. I Nyoman Sarma Ubud Sari: Organic Restaurant & Health Resort

5) 事例発表 II “Sustainable Rice Paddies in Korea ?focusing especially on their biodiversity and sustainable use”

Mr. Lee Insuk (Gyeongnam 21 Korea)

6) 自由討議

講演者への質問および提案用紙

I. 講演者への質問

1. Josef Margaf さんへの質問

- ・オーガニック認証よりも、農薬や化成肥料を使用する農法に対して認証や許可制、標示を義務付ける方向へ持っていけないのだろうか。(食品、農薬、GM 種子メーカーなどの圧力に負けない対策が必要だと感じています。
- ・水田決議が CBD の中に組み入れることによって、世の中がどのように変わっていくと思われるかお聞きしたいです。
- ・「Biodiversity products systems create values beyond money」素晴らしい考え方だが、資本主義社会の中では、システム作りに時間がかかりそうです。生産者・消費者・流通業者など、みんなが生物多様性の大切さを理解する必要があると思います。様々な分野の方に理解してもらうため、説明や講演などにおいて心がけている事や工夫している事があれば教えてください。
- ・水田の水の透明度?を2つの写真で比較(3日後、5日後、10日後など)したものがありませんでしたが、その意味がよくわかりませんでした。生物多様性の豊かな水田は、一般的には水がにごっている気がします。

2. Lee Insik さんへの質問

- ・大崎市に訪れた時の事、どのような印象を持ったのかなど、もう少し詳しく知りたいです。

3. Sarma Nyoman さんへの質問

- ・防虫対策となるハーブの使い方、つくり方について、日本でも応用したいのでもう少し詳しく教えてください。

II. CBD_COP10「水田の生物多様性」に関する決議とサイドイベントへ向けての要望、提案

- ・告知に関する方法の提案です。携帯で見られるホームページを作成し、チラシなど様々なところに QR コードを使用して紹介してはどうか。24 時間手元に情報が届けられると思います。
- ・日本の生物多様性と同様、あるいはそれ以上に各国の文化や景観は失われてきていると思います。COP10 で、各国の民謡や田植え唄などを紹介する場を設けて欲しい。
- ・戦後、合理化や収量をあげるため農薬に使用が広がり田んぼの生態系が失われていったのだと思います。今、農家の人たちの努力によって、コウノトリやトキが野生復帰へと進み、お米の価値も上がり地域としての価値もあがったと思います。こうした地域の努力を世界中の多くの人に知ってもらいたい。
- ・豊岡市で計画されているフィールドでの生物多様性農法&生きもの調査の実施を全国で連携させる。生産技術と研究者を含めた生きもの調査・生物多様性農法の調査について、調査・研究・学習プロジェクトを各地で立ち上げ、その進行について共有化できる仕組みをつくる。
- ・農水省が現在行っている農業に有用な生きものの指標化の功罪。ローカルな条件をいかに多様に評価できるのか。数値化や定量化は必要だが、どのような方法で水田の生物多様性の豊かさを評価するのが重要だと思います。
- ・多様な評価軸をどのように織り込んでいくのか。生きもの調査などの運動論と生物指標などの science をどのように方向づけるか、きちんと触れておくべき(説明するべき)だと思います。
- ・使える資源および時間が限られているので、次のことを整理して進めるべきだと思います。
①目的(GOALのイメージ) ②作業を行うための組織と役割分担 ③行程表
(全農は、BASCの一会員として参画していく予定です)
- ・決議案に、ジョゼフ氏の言われた、「水田の価値が熱帯雨林や珊瑚礁に匹敵する」ことを強調し、水の循環システムの維持管理をしてきた農民(地域住民)に対する何らかの支援(補助)の制度が大事であり、各国の地域における文化を維持し守ることにつながることを提案したい。

「地域がささえる食と農 神戸大会」
～分科会・「生物多様性とグローバリズム」～
企画書

日 時：2010年2月20日(土) 15:00～17:00

場 所：神戸学院大学 ポートアイランドキャンパス(兵庫県神戸市)

【タイトル】

田んぼの生きもの調査から見えてきたこと

【概要】

日本および韓国で広がりを見せている「田んぼの生きもの調査」について、生きもの調査の活動の経緯と日本・韓国との環境政策の違い、生きもの調査と有機農業との関係、ラムサール条約において採択された「水田決議」をふまえた、アジア・モンスーン地域における水田利用について、ヒトの視点ではなく、生きものの視点からとらえる。

【ファシリテーター】

原 耕造(NPO法人 生物多様性農業支援センター 理事長)

【スピーカー】

<韓国>

グォン・ミオク(韓国水田湿地 NGO ネットワーク)

ジュ・ジョンサン(洪城プルム生協米生産者)

<日本(予定)>

稲葉光國(NPO法人 民間稲作研究所 代表)

大川 智恵子(生活協同組合連合会 コープ自然派事業連合)

豊岡市の生産者(コウノトリを育むお米生産者)

【スケジュール】

15:00～16:00 韓国および日本での生きもの調査の状況(事例報告)

15分×4人(韓国2人・日本2人)

- ・韓国における自然保護活動および生協運動と生きもの調査との連携
- ・韓国での親環境農業と生きもの調査との関係
- ・日本での生協運動と生きもの調査との連携
- ・日本での命を育む農法と生きもの調査との関係

16:00～17:00 韓国および日本での生きもの調査の課題と有機農業との関係

アジアにおける生きもの調査と水田利用の展開

自由討論(会場からの質疑応答を含む)

【参加団体】

*下記の団体を中心に参加を呼びかけます。

NPO 法人 ラムサール・ネットワーク日本（水田部会）、NPO 法人 田んぼ、NPO 法人 民間稲作研究所、NPO 法人 農と自然の研究所、NPO 法人 生物多様性農業支援センター（四国事務所・高生連）、（財）日本野鳥の会、豊岡市、JA たじま、JA 全農、コープ自然派事業連合、佐渡市、山形おきたま産直センター、JA あきた北央、(株)アレフ、愛知・日進自然塾、生活クラブ・愛知、生活クラブ・大阪

【連絡先】

NPO法人 生物多様性農業支援センター（担当：林 賢一）

Tel；042-711-7015 Fax；042-711-7016

E-mail：khayashi@wehab.jp